

ものがたり

# 慈濟

ツーチー 2021年6月 294





● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黃筱哲

## 人間の苦しみは法で治療する

人間は苦しみが多く、無常は一瞬にして訪れ、  
全てが忍び難く、身につまされます。

誠意のある愛で、寄り添い慰めましょう。

苦集滅道\*は法を薬とし、

縁を大切に、分秒わかたず精進し、

善業を蓄積することで、福を造り、智慧を修めるのです。

\* 仏教の根本教理を示す言葉で、苦諦・集諦・滅諦・道諦という四つの真理のこと。この世のすべては苦であり、苦の因は煩惱であり、それを滅して八正道を実践する道を進むことで理想の涅槃に至る。



慈濟日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

劇的な気候変動下での行蘊

善耕／訳 4

【コロナ特別報道】

コロナ禍での愛

葉美娥&常樸／訳

8

私たちの脆さと強さ

御山凜／訳

24

慈濟がコロナケアセンターの電話相談窓口チームに参加  
ホットラインで在宅検疫の人に寄り添う

荳荳／訳

32

【世界に目を向ける】

マレーシア／インドネシア／カンボジア

慈願／訳

37

【行脚の軌跡】  
心身を整える

濟運／訳 51

【證嚴法師のお諭し】

無常を思い、一秒一秒を心して過ごす

慈願／訳 58

【リサイクルボランティアとその歩み】

快適な生活環境から踏み出した地域の婦人

慈願／訳 64

【表紙の物語】

日常的なリサイクルファミリーアルバム

心嫻／訳 68

【世代をつなぐ】

教育の方針が見つかった

心嫻／訳 90

【国際慈善・マレーシア】

愛で心を充実させる

善耕／訳 98

五月の出来事

濟運／訳 108

## 表紙



台湾全土の慈濟リサイクル拠点は、その一つ一つが大家族のようである。台南市の安南リサイクルステーションでは、旧正月の間、分別する必要のある回収物が大量に送られてきた。ボランティアたちは我が家のごとく、早朝から夕方まで苦勞を厭わず作業を続け、共に法悦に浸っていた。(撮影・黄筱哲)

## 劇的な気候変動下での行蘊

二月下旬、温帯から亜熱帯に位置するアメリカテキサス州で大雪が降った。各種異なったエネルギーによる発電所が、それによる凍結で大停電を起こした。今回の大雪は稀に見るものだが、北極圏の温暖化によって、寒気が南に向かって流れたことが原因である。急激な低温となったテキサス以外にも、ヨーロッパ、アジア、北アメリカなど多くの地域が寒波に襲われ、急激な気候変動に再び警鐘を鳴らすこととなった。

自然災害発生頻度が増加しているにもかかわらず、人類はほとんど成す術が無い。過去二十数年間、世界各国は温室効果ガスの排出が環境悪化を引き起こしていることは認めてきたが、経済発展などの理由で、二酸化炭素排出削減の様々な協議は、共に協力することを確認しただけにとどまっている。

例えば、アメリカは大量の二酸化炭素を排出しているが、一九九七年に国連が採択した京都議定書を拒否し、大気中の温室効果ガスの量を適切なレベルに抑制することを確約しようとしなかった。一方、発展途上国は、経済を犠牲にして二酸化炭素排出削減に賛成すれば貧困から抜け出せない、という矛盾に陥った。

二〇〇五年に京都議定書が発効に至ったことで、アメリカ西海岸の都市シアトルは率先して削減目標を達成させ、数百の都市に共同で都市の力でもって京都議定書の目標達成を呼びかけた。その行動で、大国は領土が広く、政策を行き渡らせることが難しいという弊害を乗り越えることができた。

国連がめざす「二〇三〇持続可能な開発目標（SDGs）」は、環境、経済、社会の各分野で一步踏み込んだ持続可能な開発の核となる目標を掲げている。これによりSDGsを実現する単位はもはや国レベルが対象であるだけでない

く、世界中の多くの都市が次々に合意することとなった。一部の企業も、資源再利用の循環経済モデルで呼応している。たとえば、毎年世界の木材の約1%を消費する有名なスウェーデンの家庭用品会社は、かつての「家具の買い替えは服の買い替えのように」という「ファストファッション」のローガンを使用しないことにし、昨年から台湾でも家具のレンタルサービスを開始した。

限りある資源の中で、生産活動が最終的に環境の破壊や汚染をもたらしている。日常の衣食住と物流は私たちの生きる地球に影響を与えている。元々人間と土地の間には記憶や感情などを含む深いつながりがある。

今期のカバーストーリーでは、フォトジャーナリストが自分にとって馴染み深い台南市の安南リサイクルステーションから出発し、リサイクルボランティアのライフストーリーを記録するほか、彼らが暮らす土地の日常も撮影している。

このリサイクルステーションで、彼はおばあちゃんと一緒に来ていた幼稚園児の兄妹を見かけた。時に回収物の分別を手伝ったり、遊んだりして、気ままにステーションの中を動き回っている二人とは知り合いではなかったが、そのシーンは自分もかつて子供の頃にここへ来て手伝ったことがあるという温かい記憶を呼び起こした。その光景は、成人して映像によるリサイクルボランティアの記録をしている彼にしてみれば、自身の心願の伏線だと言えるのかもしれない。

ボランティアは「福を惜しみ、物を大切にする」気持ちから環境保全を行っている。この思いには、前人への感謝の気持ちと次世代への配慮、そして土地を守るという確固たる使命感が含まれている。心念や作為は微々たるものに見えるかもしれないが、それらは仏法で謂われる「行蘊（ぎょううん・意志や心の作用）」に属し、僅かながらも積み重なって、世界の永續発展の共同目標に呼応している。（慈濟月刊六五三期より）

# コロナ禍での愛

二〇二一年一月、新型コロナウイルスの感染が急速に拡大し、世界全体の累計感染者数は一億人を突破した。これは世界の七十八人に一人が感染したことに同じである。この大変な時期に、慈済は慈善の歩みを止めることなく、今まで以上に感染者と近距離の接触が多い、高リスクの医療従事者を安心させ、コロナ禍で影響を受けた家庭に安定した生活を与えている。

文・顔婉婷（慈済基金会文史部職員） 訳・葉美娥&常樸

●部落の年長者を気遣い、桃園慈濟ボランティアは万全の備えで1月29日、春節の祝福品を届けた。  
（撮影・黄筱哲）



「お

父さん、長い間本当に有難うございました。ごめんなさいね、疲れただしょうね。家に帰りましょう……」。

日本川崎市の聖マリアンナ医科大学病院の集中治療室で、看護師が悲しみをこらえながらタブレットを持って、新型コロナウイルスの感染症で死を間近に迎えた九十代の高齢者と家族の「お別れ」の場面を取り持った。東京医科大学八王子医療センターでも、入院して数日後に病状が急速に悪化した八十代の患者が世を去った。その家族が事後の手續きのために病院を訪れた時、医師は家族に、患者は

という不安を抱えている。防疫に成功した時の喜びとウイルスと闘うストレスや不安、この二つの全く異なる感情が心に無形の網を織り成し、重圧が医療従事者にのしかかっている。しかし、彼らはひるまず、最前線でウイルスの侵入を食い止めようとしている。

しかし、新型コロナウイルスの変異株が現れた。その感染力は更に強く、その勢いは止まらない。二〇二一年一月、世界の感染が急拡大し、感染者総数は一億人を突破した。この数字は世界の七十八人に一人が感染していることと同じであ

「生涯を満足に過ごしたので、残り少ない日々を使う人工呼吸器を若い人に使ってもらいたい。気管切開をしない選択をする」と言ったことを伝えた。家族はそれを聞いて体を震わせ、涙にむせんだ。

このような情景は日本だけでなく、感染が深刻な国では絶えず起きている。この一年余り、各国の医療システムは崩壊の危機に瀕しており、医療従事者は疲れた体を奮い立たせ、死に神の手から患者の命を奪い返そうと必死になっている。同時に、自分も感染するのではないか、或は愛する人に感染させるかもしれない

る。しかもこの一カ月の感染者の年齢層が若年化しており、潜伏期は無症状者が増えていることも変異株と無関係ではない。世界保健機関（WHO）の報道によれば、世界で少なくとも七種類の変異株が出現している。

「気象」も変異株が活発になる要因である。ラニーニャ現象で北半球の冬は例年より寒冷になり、人々が集まる機会を増やしたと言える。また一年以上の感染防止対策に、人々は多少なりとも疲れを感じていたと同時に、一部の国ではロックダウン対策によって状況が好転したた

め、人々の警戒心も緩んでしまったことが原因となっている。様々な要因が相まって、変異株が各国に広がる速度を速めてしまい、医療システムの崩壊も早まり、感染した医療従事者も少なくないし、亡くなった人もいる。

中国では、湖北省武漢市がロックダウンの一周年を迎えたが、再び感染が遼寧省、河北省、黒龍江省及び首都の北京に広がった。国内感染の症例が多く現れただけでなく、イギリスの変異株がすでに広がっていたことが分かった。政府は緊急にロックダウンを実施し、全面的にPCR検査を行う措置を取るほか、間

もなく訪れる中国の春節の帰省ラッシュという民族大移動に備えて、必要以外は帰省せずに現地で旧正月を迎えるよう民衆に呼びかけ、感染拡大が落ち着いてくれることを祈った。

### 戒め慎みながら奉仕を続ける

海峡を隔てた台湾でも、感染は拡大していた。二〇二〇年の一月を思い出してみよう。当時はまだ目に見える感染拡大

●中国瀋陽市鉄西区の化工小区でロックダウン措置が取られた。慈済ボランティアは防護服を身につけて、ケア世帯に冬季の支援物資を届けた。

(撮影・李立新)







はなかったが、台湾に初めて海外からと  
本国の感染者が現れた。その一カ月後、  
台湾北部の病院でクラスターが発生し  
た。そのまま四月まで国内感染症例は続  
いたが、幸いに感染経路がほとんど追跡  
できる状況にあった。

六月が過ぎると、人々の生活は元  
戻ったように感じられた。出国できない  
ことと、マスクをつけるという習慣以外  
は、特に何の不自由もなかった。そして  
一年が過ぎ、皆が二〇二一年を迎えよう  
としていた頃、思いがけず、二回目の病  
院内クラスターが発生した。国内感染症

例も次々に確認され、政府は緊急に感染  
防止措置を強めたが、人々に恐怖や不安  
が広がった。

桃園は台湾の玄関口である。世界中か  
ら旅行者や帰国者が押し寄せる桃園国際  
空港では、一旦空港の検疫で陽性と診断  
されると、直ちに感染症指定病院に送ら  
れて隔離されることになっている。桃園  
の衛生福利部桃園病院はこの度の感染症  
の受け入れ協力医療機関であるが、一月  
中旬に国内感染症例が発生してからは、  
中央疫情指揮センター（感染症対策本部  
に相当）が「桃園病院プロジェクト」を起

動し、隔離対象者を拡大したため、緊急  
に医療従事者を呼び戻してPCR検査を  
行った。この病院の入院患者を他の病院  
に移送するなどの緊急対策が行われた。

自由が制限されて、人との距離をとる  
ことになっても、人々の心は温かく、次々  
に病院に善意が寄せられた。弁当屋は無  
料の弁当を数日にわたって提供し、ある  
人は南部からお菓子や飲み物を送り、あ  
る企業は何ダースもの栄養補給食品を届

● 慈濟はクラスターの発生を避けるため、旧正月  
前の食事会を取り消し、「世帯ごと」に生活用品パッ  
クを配付する」方式に代えた。板橋のボランティア  
アは、年寄りと世間話をし、日常生活に気を配った。

け、携帯用カイロを贈ったところもあり、皆で病院職員を応援した。慈済慈善事業基金会もその病院と桃園市に、安心祝福パックと様々な感染予防物資を寄贈した。

●板橋の慈済ボランティアは、ケア世帯と一人暮らしの高齢者に「年越しの食べ物」を味わってもらうために、特別に台湾風おこわと「栄養満点漢方スープ」を追加した（下図）。その他、慈済は、家族構成に基づいて異なった金額のプリペイド式の「チャリティー買い物カード」を寄贈し、コンビニと連携して、ケア世帯が正月用食べ物を購入できるようにした（左図）。



同時に慈済は、政府の感染予防対策の引き締めに応じ、防疫ルールを状況に応じて調整し、また集団感染のリスクを避けるために大規模な活動をしばらく見送ることにした。毎年、旧正月前の一カ月間は、冬季配付や年越しの集いが大々的に行われ、ケア世帯とは早めに年越しの喜びを分かち合っていたが今回は感染防止策の強化に応じて食事の集いを取りやめ、代わりに一軒一軒、物資を配付したり、あるいは静思堂やリサイクル拠点など屋外で配付を行うことで、屋内での集まりを減らした。

## 安心祝福パック

2020年2月25日～2021年2月4日

文・張郁梵

慈済は、45250個の祝福パックを13の県と市の役所に届け、それらは域内の「自宅待機」や「自宅検疫」している人々に転送された。

今回、準備した部立桃園病院の医療スタッフ向けの安心祝福パックは、すぐ食べたり飲んだりできるように「栄養補給」、「免疫力アップ」、「心の祝福」を3大主体にしている。中にはジンソー草本茶、福慧粥、五穀粉、即席飯、祝福ストラップ、證嚴法師からの見舞いの手紙及び『過関』と『静思語』の2冊の本、「慈済」月刊誌など9つの品物が入っており、防疫第1線に立つ桃園病院の医療スタッフにも、永遠の祝福と寄り添いを込めて送られた。

各県と市の役所に贈り届けられた、これまでの祝福パックと異なるのは、医療スタッ

フ向けに「浄斯本草茶」を追加したことである。桃園ボランティアの温素蕊（ウエン・スールイ）さんは、これは花蓮慈済病院のチームが開発し、台湾本島の8種類の植物の成分を配合して作られた複方茶のティーパックで、毎日煮出して飲むことで免疫力を高める効果があると説明した。更にボランティアの劉明交（リユー・ミンジャオ）さんが『過関』という本を紹介した。證嚴法師が修行していた頃の心の歩みが綴られているが、医療スタッフがそれを読んで、今回のコロナ禍という危機を乗り越えるように願ったものだと言った。



桃園静思堂では本堂にそれぞれ5つのテーブルを配置した4つのブロックを設け、テーブルの上には9つの品物が順序に従って並べられてあった。少数のボランティアが距離を取って、テーブルで安心祝福パックを詰めていた。贈り物が9点あるのは、中国語では9と久が同じ発音で長く平安と幸せが続くように、という意味が込められてあるからだ。



台湾慈済の慈善活動の歩調は、コロナ禍の広がりや調整はされても、止まったことはない。海外でも慈済ボランティアは今までのように生活困窮者や病人、被災地の人々に寄り添い続け、コロナ禍で止まったことはない。カンボジアのバタンバン州 (Battambang) の水害で、昨年末に

●桃園のボランティアは、正月の贈り物を持って山奥まで出かけ、復興区小烏来のタイヤル族のお玉婆ちゃん一家を訪ねた。色々な思い出に花を咲かせ、「月に一度見舞いに来る」と約束した。

配付活動を行う予定だったが、政府の規制により今年の一月に延期した。ボランティアが約束を果たした時、「慈済人は必ず約束を実行してくれると分かっていたました」と現地の役人が感動して言った。インドでは、慈済はカミロ修道会と四回目の協力で契約を交わした。また、チ

ベトナムのベトナム仏教団体とも共同で、生計が立てられない貧困家庭を支援する配付活動が続いている。マレーシアのパハン州 (Pahang)、ジョホール州 (Johor) 及びサバ州 (Sabah) は、第三波のコロナ禍と雨季の水害のダブルパンチを受けた。ボランティアは緊急に視察し、生活物



資を配付した。中国では、蘇州や昆山などの慈濟職員がボランティアと手を携えて、緊急に医療用マスクなどの防疫物資を集めて、河北省石家荘の病院に届けた。

最前線の医療従事者や感染拡大防止に関わるスタッフを応援し、行動で人々に「慈

●慈濟はインドで数多くの宗教団体と協力して、食事に事欠く貧困世帯を支援している。南部セラフ寺院は、夜間外出禁止令を守り、去年末に感染状況が緩和した時に初めて、4百世帯に緊急配付を行った。(写真提供・慈濟花蓮本部)

濟はずっと共にいますよ！」と訴えた。

(慈濟月刊六五二期より)

## 私たちの脆さと強さ

三人の患者さんが立て続けに目の前で亡くなり、うち二人は新型コロナウイルスの患者で、親しい人が看取ることも許されなかった。患者の家族をケアしながら、私は突然、台湾の母親に会いたくなくなった！台湾への帰国は容易ではないとはいえ、人生で明日が先に来るか、それとも無常が先かは、誰にも分からないのだから…

一一〇二〇年十二月十五日、アメリカワシントン国家大聖堂は三百回鐘を鳴らし、新型コロナウイルスによる肺炎で亡くなった三十万人を追悼した。鐘は約三十分間鳴り響き、重く長い時間が続いた。しかし、アメリカ政府がワクチンの接種

を開始することを発表してから半月も経たない内に、初めてのイギリス変異株が、アメリカ国内で確認された。二〇二〇年二月から、アメリカで初めて新型コロナウイルスによる死者が出る、各地に不安が広がり、人々は病院に

行かなくなつた。自分がロサンゼルスで勤めていた病院の経験から言えば、以前は一日およそ三千人も人が病院を訪れていたが、新型コロナウイルスの感染が爆発的になると、その数は三百人にも満たなくなった。患者が減ったことにより、病院は無給休暇制度を取り入れ、病院の行政担当者たちに早期退職希望者を募り始めた。そのため、私は自分から早期退職を申し出た。

退職後の生活は、自分にとって大きな変化でもあった。私はずっと、自分には一体何が出来るのかと考えていた。以前病院では病院内外の連絡を担当していたが、患者やその家族だけでなく、時には

### アメリカの新型コロナウイルスの状況

- ▶▶ 1月15日の統計では、約2千3百万人が新型コロナウイルスに感染。
- ▶▶ 新型コロナウイルスの感染拡大が最も深刻な国であり、感染者数は2番目に多いインドの2倍。1月15日までの統計では、アメリカ全土で約38万人が感染で亡くなっている。
- ▶▶ 約1千万の人口を抱えるロサンゼルス郡は、1月上旬までの統計によると、感染者が83万人を超え、平均して6秒に1人が感染し、10分に1人が亡くなっている。

資料:アメリカCDC(疾病予防管理センター)

他の病院や養護施設と関わる機会もあった。運が良かったのは、正式に退職する前に、あるNPO法人のホスピスセンターでトラブル解決に協力する機会があったことだ。私が長年病院で働いていたこと、またもうすぐ退職することが分かること、面接に来てほしいと声をかけてもらった。そして私の人生に、ソーシャルワーカーとしての新たな幕が上がることになった。

## 生と死の狭間で伝わる想い

新しい仕事に就いたとはいえ、ホスピスの患者さんのために、依然として病院

で忙しい日々を送る中、自分の目で新型コロナウイルスに負けない人々の優しさと希望を見ることができた。

以前務めていた病院は、毎日何百人という新型コロナウイルスの疑似感染者が運ばれて来て、医療従事者が三度も衛生機関に検査をするよう呼び出されたこともあった。第一線で感染防止に努めている人も日々不安の中にいることは容易に想像でき、仕事を休んだりストライキなどが起きるのも無理はない。ただ、その中で感動したのは、そこに残った医療従事者たちは普段の何倍もの仕事量をこなしているにもかかわらず、人を助けることを天職として、使命を全うしているのだ。

二〇二〇年四月初め、アメリカで感染して亡くなった人の数が、世界最多にまで上った。七月には、再度新型コロナウイルス感染者数がピークに達し、患者の気管切開が必要なために、多くの病院が全ての手術を取りやめると宣言した。政府の感染防止策により、多くの患者が病院に運ばれた時、家族は中に入ることができなかった。そのため、病院の出入りが可能な私たちソーシャルワーカーが携帯やタブレットなどを利用して、病院での患者の状況を家族に知らせ、患者と家族はお互いの顔を見ることができるようになった。

その間、患者の家族は病院にいる身内を心配し、焦りや緊張などで、病院側と

の関係が冷え切ってしまい、多くの意見の食い違いによって、互いに信頼できない状態に陥っていた。私も、二十四時間以内に三人の患者の最期を看取った。その中の二人は新型コロナウイルスによる肺炎で、最期の時、側に慣れ親しんだ人は一人もいなかった。

コロナで死んだのであろうとかならうと、命が終点に来た時、遺体の処理が問題になる。葬儀社がそのまま火葬できるのか？宗教が異なる家族の場合、遺体はどのように処理したらよいのか？喪失の痛みに苦しんでいる時、このような問題は、私たちソーシャルワーカーの介入で、一連の物事がスムーズに進むようになる。



十二月下旬にはほとんど崩壊し、集中治療室には空きがなく、救急車も長い列を

成して、救急外来に入れずにいた。また死体安置所には遺体を納める余裕がなく

なったため、政府は兵を出動させて事態の収拾を図った。

いっような時でも、地域住民の心を落ち

●新型コロナウイルスの影響により国境が封鎖され、異郷の地で生活している人は故郷に帰れない。慈濟ボランティアであり、ホスピスのソーシャルワーカーでもある曾慈恵さん（左側）は、困難を乗り越え、がん患者が無事に中国山東に帰る手伝いをした。

これら家族に付き添って後事を処理していた時、私は突然台湾にいる年離れた母親のことを思い出さずにはいられなかった。「母はどうなるのか？母は八十三歳で、かなりの高齢だ。私は他人の面倒を見ているが、一体誰が私の母の面倒を見るのだろうか？」これも、二〇二〇年十一月に私が四十日間の休みをもらって台湾に帰国した原因の一つである。たとえ十四日間の隔離があっても、故郷に帰る気持ちに変わりはなかった。私はあまりにも多くの死を見届けて来たからだ！人生は果たして明日が先に来るのか、それとも無常が先に来るのか、誰にも分からない。人は往々にして、無常が訪れ

た時、自分が所有しているものを殊更大切にする。台湾に帰国していた間、母親と過ごただけでなく、花蓮に帰って證嚴法師に慈濟国連チームの仕事やシエラレオネ共和国での慈善活動プロジェクト、インドの貧困救済方案などについて報告した。

「使命を全うする人」に敬意を込めて

十二月末、私はアメリカのロサンゼルスに戻って、制御が効かなくなったコロナ禍に立ち向かった——人口約一千万人のロサンゼルス郡は、医療システムが





着かせることがとても重要だ。慈済ボランティアは、疲れている医療従事者へのケアに一層力を入れなければならぬ。彼らは毎日多くの人が死んでいく中で、たとえ専門的な訓練は受けていても、生きていた人が次々と目の前で死んで行くのを見れば、無力感は大きくなっていく。たとえ経験豊富で、長年病院に努めている医者でさえも、人間が持ち合わせ

●全世界の新型コロナウイルスの感染者数の4分の1を占めているアメリカ。医療崩壊が迫る中、慈済ボランティアはロサンゼルス政府が設置している防疫ホテル（政府指定隔離施設）に出入りする許可を得て、実際に患者のケアや関係機関の運営に参加することができた。

ている心の脆さを感じる時もある。  
そのため、当面の急務は第一線で感染

防止に努めている人の心のケアである。慈済アメリカ総支部は毎月、地域で働いている医療従事者のために心温まるお茶会を開催している。診療所や社会福祉センターで働いている人たちが集まり、お互いの境遇を話し合い、様々な解決方法を討論している。交流プラットフォームを提供することで、情報を交換するだけでなく、互いに補完する機能も果たそうとしている。ボランティアは、かご盛りのフルーツや五穀粉、チョコレートなどを持ち帰ってもらっている。——あな

たたちの苦労は分かっており、奉仕を皆が目にしていることを知って欲しい。

新型コロナウイルスによる感染症が発生すると誰が考えただろう。精一杯職務を堅守する「使命を全うする人」が、誰かが自分たちを見守っていることを知った時、元氣が出てより遠くまで進むことができるのだ。新型コロナは人類に警鐘を鳴らした。今後も多くの試練が待っているだろうが、その時は皆が準備し、解決方法のない大きな変化の中で、危機が輝かしい人間性を発揮する転機となることを願っている。

（慈済月刊六五一期より）

# ホットラインで 在宅検疫の人に寄り添う

文・陳麗安 撮影・蕭耀華  
訳・荳荳



十四日間の在宅検疫と七日間の自己健康管理期間、様々な心身のストレスに対して、志願して相談の受け付けをする人たちがいる。

昨年の九月から、慈済ボランティアが衛生福利部「コロナケアセンター」の電話相談窓口チームのメンバーになった。一人ひとりが日に百通もの電話をかけて、その思いやりを相手に伝えている。

**旧** 正月前の一月下旬、台湾への帰国者数はピークに達したと同時に、

衛生福利部立桃園病院のクラスターによって制限対象が広がったため、台湾全土での在宅検疫と検疫件数が五万人近くに上った。十四日間の検疫期間中、地方の保健機関や区長、担当者などが、毎日気を引き締めて隔離者の所在を追跡すると共に、衛生福利部（以下、衛福部と略す）のコロナケアセンターから電話で、在宅検疫者に関心を寄せた。

「こんにちは、衛福部のコロナケアセンターです…」衛福部一階では、ボランティアがリストに従って在宅検疫者に電

話をかけ、検疫期間中の心身の健康管理や他の相談などを受け付けていた。二〇二〇年二月にコロナケアセンターが設立されて以来、既に十八万件以上の電話が掛けられた。

慈済基金会は衛福部の招聘により、二〇二〇年九月にコロナケアセンターのボランティアチームに加わり、今は電話訪問のローテーション人材の主力となっている。昨年九月から参加している戴素蘭（ダイ・スーラン）さんは慈済ボランティアであるが、市民に電話をかけるときは衛福部ケアセンターの電話訪問の一員であり、そこでは皆が喜んで貢献している。

この慈済ボランティアたちは、病院ボランティアや長年の訪問ケアなど豊富な実務経験を持っており、中にはプロの看護師やソーシャルワーカーもいる。総勢七十五人が十五チームに分かれて、毎日一チームが当番となって、電話を通して、検査者の所在追跡と健康状態を把握し、家から出られないことへの焦りや感染の不安を和らげている。

「一人あたり一日に百回を超える電話が割り当てられるのは普通です」と現場にいた慈済ボランティアが言った。ケアの範囲は台湾全土に及び、電話の相手は隔離専用ホテルや在宅検査している人た

認する。しかし、中には「玄関の扉を開けるとびっくりしました。あまりにも大勢だったからです」と言う人もいる。

また、あるボランティアの記憶によると、電話口で相手が「ホームレスになったような気持ちです。手元に一銭もお金がないのです！」と訴えた。その人はイギリスから四十八時間乗り継いで台湾に到着した後、直接防疫ホテルに入ったため、台湾ドルに両替する時間もなく、そのまま十四日間の隔離に入ったので、とても気が沈んでいた。幸いに、ボランティアスタッフが話を聞いて辛抱強く説明したため、最後には理解を示したそうだ。

ちで、「電話する回数は多いのですが、幸いにも、電話が繋がらないことはめったにありません」。

**家から出られなくて支援してくれる**

「電話ケアの中では、予測しなかったことや面白いことがたくさんあります」。戴さんによると、海外から台湾に戻った人は時差のために、隔離開始後の数日は電話を取れないことがよくあり、電話に出ないと直ぐにケアセンターに通報し、現地の防疫担当者と警察が通報を受けると直ちに登録されている住所に行つて確

毎日朝八時半から午後五時半まで、何百通もの電話をかけるのだから、感情的になっている人に出会うのも無理はない。ボランティアはじっくり耳を傾け、様々な方法を使つて慰める。それでも相手が落ち着かない場合は、1925番の「リリーフライン」に回し、専門の心理療法師に引き継いでもらう。

ボランティアは電話で、検査期間中に体調が悪くなった場合は、医療機関を受診する必要があるかどうかを見極めるためにも、1922「コロナ予防ホットライン」にかけてくれるよう促した。戴さんによると、心身の問題に加え、検査

ホテルの滞在費用を支払う余裕がないことを心配する人がほとんどだという。そういう時は、1957「福祉相談ホットライン」に電話で相談し、補助プランを理解してもらうことを勧めている。

思いやりのある言葉をかけて自然な会話をしながら、ボランティアは受話器を通して検疫中の人の心を落ち着かせることに最善を尽くしている。人々が希望、共感、誠実なケアを感じた時、電話を切った後の気分は最初の落ち込んでいた状況とは全く違ったものになっているはずだ。

「多くの人のフィードバックには、政府の細やかな思い遣りを感じていると

あります」と戴さんが語った。隔離が始まった時は、時間的、空間的及び個人的な習慣の違いにより誤解を招くこともあり、多くの人は「台湾の隔離がこんなに厳しいものだと想像していませんでした！」という。しかし、最終的には、自分が地域の感染リスクを減らし、感染拡大の要因とならないことを理解し、協力するようになる。

コロナ禍の変化に対応して、慈済ボランティアは既に今年六月までのローテーションを組んでいる。電話をかけ続け、電話の向こうで落ち着かない心を慰め、人々に寄り添い、お互いの健康を守り続けている。(慈済月刊六五二期より)

世界に目を向ける

## マレーシア

◎文・マレーシア人文記録ボランティア 訳・慈願

# 新年に避難 復興を支援してくれた

二〇二一年の元旦が過ぎてから、連日の豪雨で水害が発生し、マレーシア中南部で三万人以上が緊急避難した。パハン州とジョホール州の被害が最も大きく、トレンガヌ州とクランタン州、セランゴール州及び東マレーシアのサバ州からも被害情報が伝えられた。

パハン州のリプス県ベンタ区の住民である劉坤華（リウ・クンホウ）さんは、一月三日の夜、水かさの増え方がとても速く、物を持ち出す時間もなく、家族と小高い所に避難した。彼は「洪水が後ろから追いかけてきて、まるで津波のようにとても恐ろしかった！」と当時を思い出して言った。

慈済人は直ちに災害支援に駆けつけた。洪水が引いた後は至る所が破壊



撮影・頼玉貞

されており、電気も水も止まり、清掃と後片付けをしていた住民は疲れて空腹だった。ボランティアから温かい食事と飲料水を受け取ると感激し、明日また来てくれるかと聞いた。「また来ますよー」という一言は、彼らが最も温かみを感じる言葉だった。



ボランティアは、ジョホール州クランアン県、コタ・ティンギー県、ジョホールバル県、バトゥパハ県及びパン州クアンタン県、リピス県、テメルロ―県等を重点支援地域に指定し、避難所に食糧や布団、防疫用品などの物資を提供すると共に、帰ってきた住民の清掃を手伝い、祝福トートバッグを配付し、三千人分余りの温かい食事を届けた。

撮影・黄文興



しかし、コロナウイルス感染症の第三波はそれまで以上に拡大したため、一月十二日、マレーシアは緊急事態に突入し、行動制限令によって、訪問ケアの名簿作成がより困難になった。コロナ禍と水害の双方から被害を被った家庭を、ボランティアは以前作成した名簿に基づいて見舞金の配付対象とした。以前のように決まった場所で行うのとは異なり、一月二十二日から「家庭ごとの配付」と小規模の配付活動をするので、大衆が密集するリスクを減らした。二月十九日までに三千百二十二世帯に各種支援を行なった。

## インドネシア・西ジャワ州 再建された吊り橋は 生気に溢れ、 往来が絶えない

文・撮影・Moch Galwan 訳・慈願

西ジャワ州ガルトト県では、デボック村と対岸の二つの村を結ぶ吊り橋が二〇二〇年十月の洪水で流されたため、村人は遠回りするか、水位が下がった時を待ってやっと川を渡り、仕事や学校に行っていたので、危険極まりなかった。





バンドンの慈済人は、軍部と協力して吊り橋の再建にあたったが、現地の民衆と専門技術を持った非営利高所救助組織、バーチャル・レスキュー・インドネシアのボランティアも熱心に建設を手伝った。今年一月六日、「チカソ川愛心吊り橋」の除幕式が行われ、長さ八十メートルのステンレス製の新橋に村人は喜びに沸いた。村人のアイナさんは、農作業からの帰り道が川の水に阻まれなくなったことを喜んだ。また、村人のアリは、父親と一緒に経営する額縁販売店の商売が以前のように繁盛し、バイクで荷物を運べるようになったので、「アラア」と慈済に感謝しています。ボランティアの平安と健康を祈っています！」と言った。（慈済月刊六五二期より）





## カンボジア・バットアンバン州

◎文・潘曉彤 訳・慈願

# 相次ぐ天災 一千万世帯に米を支援

二〇二〇年はカンボジアの人々にとって特に大変な年だった。年初に新型コロナウイルス感染症、五月から九月にかけては旱魃、九月からはたて続けに襲ってきた暴風雨で洪水に見舞われた。水害が落ち着いたと思ったら、またコロナ禍が再燃した。



撮影・リナ・ファ



撮影・エウム・サリス

プノンペンでの慈済ボランティアは、昨年十二月下旬に最も水害が深刻だったバタンバン州で配付を行う予定だったが、十一月下旬に政府より防疫に関する緊急禁止令が公布された。年末になってやっと解除され、今年の一月五日から十二日まで六つの県で、二万百三十一世帯に白米と食用油の配付を行った。九つの会場では、それぞれ徒歩、バイク、トラクターによる受取を区分けすることで、配付をより迅速にした。



撮影・ネオウ・スー・トアン



人文教育は、  
礼儀を学び、生活の質を向上させるだけでなく、  
それによって、  
より物を大切にし、人を愛するようになります。  
目の前のお茶に感謝

## 心身を整える

◎文・釋徳仇／訳・済運

静思茶道教員チームは春節の休みを利用して精舎で普茶した時、接客室で上人に慈済大学国際学院静思茶道課程が円満に終了したことを、学生たちは学習意欲が高く、成績も非常に優秀だったことを報告しました。上人はそれを聞くと、「慈済道場での静思茶道など人

六日間にわたって二万世帯に配付し、延べ千四百八十七人が投入した。今回、プノンペンから来た五名の法師と慈済ボランティア、カンボジア総理府青年志願医師協会（TYDA）、カンボジア青年連盟（UYFC）及び各地区の軍や警察が参加した。

慈済ボランティアは昨年二度にわたってバットアンバン州へ調査に訪れたが、地域によっては一週間から一カ月余りにわたって一万ヘクタール以上の田畑が水に浸かり、稲穂が水に浸ったために発芽していた。被災者はコロナ禍で収入が減っていた上に、五月に植えられた稲は水不足のために収穫が悪く、八月には再び植えられた種が水害に遭ったのだった。以前は借金をして土地を借り、種もみと肥料を買っていたが、今回は漁に出るか或は出稼ぎしても返済できないと言う。慈済は世帯人数を考慮に入れて配付する米の量を決めたので、彼らの負担が大きく減った。村人も慈済の竹筒歲月の精神を学んで人助けをするようになった。



撮影・潘曉彤

文課程で最も重要なのは、礼儀を教えることであり、大衆に物を大切にし、仏法でもって心身を調整し、間を置かず、善行と親孝行をするよう教えることです」と開示しました。

私たちの人文課程で最も重要なのは礼儀を学んでもらうことであり、「礼儀があるものは理に適う」と言われるように、今のような環境の中では生活の質を向上させ、人と人の間で礼儀と態度に気をつけるよう指導しなければなりません。

毎回茶杯（ちゃはい）を持ち上げてお茶を飲もうとする時、ここでお茶が飲めるということとはとても意味のあることだと気づきます。私はお茶を流し込むだけで、味わっていません。いつも一杯のお茶も飲み終わらないうちに、誰かに、「師父（スーフ、お弟子さんの法師への呼び名）、何々の時間ですよ」と言われると、急いで出て行きます。結局、私はお茶の味を知らず、飲むお茶さえあればいいという状態です。あなたたちの静思茶道を聞いて「なんと幸せなの

でしょう！」と思いました。皆さんは湯呑みを持ち上げた時、一杯のお茶が飲めることに感謝しなければいけません。考えてみても分かるように、苦難にある人は汚い水を飲むのも容易なことではありません。あなたたちがお茶を飲む前にビデオを放映して、学生たちに苦難に在る人たちの生活を見せたらどうでしょう？

お茶一杯を飲むにも感謝することが大切です。汚い水を遠いところから運んでくる人さえいるのです。大愛テレビ局の記者が甘肅省の山村の女性をインタビューしました。彼女は水の入った桶を担いで断崖絶壁を歩くのです。その重い水桶が揺れる度に彼女の息切れの音が聞こえました。そこではそのような生活をしているのです。女性は毎日早朝に起き、先ずする仕事が水を汲んでくることです。山の上から水のある所まで行き、淀んだ湧き水で桶をいっぱいにしてから、それを山の上まで担ぐのです。往復八時間も掛かります。彼女たちの生活を見れば、私たちは水を大切にしなければなら

と思うようになります。私も蛇口を捻ると、慌てて水を小さくするのですよ。水も幸福も大切にすべきです。

ですからお茶一杯であつても、とても貴いのです。茶は植え方に始まって、苦勞して育てます。特に静思茶は私も摘んだことがあります。一つの芯に葉っぱが二つ付いている様子に意味を感じます。つまり、私たちが幸福な人生を送り、それを享受している時に、苦難に在る人たちの苦勞を思い浮かべるべきです。従つて、真の茶道人文とは、人には愛があり、物も人も大切にすることを訴えるものなのです。

顧佩珍（グー・ペイジェン）師姐（スージェ）と謝春梅（シエ・チュンメイ）師姐、余碧真（シヨウ・ビージェン）師姐たちは上人の開示に感謝すると共に、茶道コースを通じて人間（じんかん）菩薩を募つた経緯を報告しました。今慈済に参加している三百十八人の教師のうち三分の一以上が茶道コースを経て来たため、コースでは仏法を取り入れて人々を導いています。大衆を導くにはどんな人

に対しても通じるような様々な法門がなければならない、と上人は言いました。即ち、礼儀、善、愛がある中で、どのようにして身と心を調整し、人生を無駄にせず、直ちに善行に移すかが一番重要なことなのです。

### 方向を定め、進歩し続ける

花蓮慈済病院総務室の沈芳吉（シェン・ファンジー）主任は警備室と厨房の同僚を引率して精舎に帰り、基金会建築処の人たちと共に年始の挨拶をしました。上人は、警備員が忍耐と優しさでもって慈済病院玄関先の交通を指導し、心が焦つて診察に来た患者やその家族でも安心して医者にかかることができるようにしていることに感謝しました。

「病院は毎日、出入りする人がとても多く、付き添つて来る家族は患者を愛しているために心配するのですが、一方、やるせない気持ち

ちや不満を抱える人もいます。しかし、私たちは決まった場所で人々の情緒や悩みに立ち向かっています。菩薩が苦難に喘ぐ衆生に對するように、彼らが私たちの言動から慈濟人文精神に接することで、心を落ち着かせています」。

「先ほどの報告によると、お年寄りがよろけながら歩いているのを見て、直ぐに支えてあげたとのことですが、彼らの『ありがとう』、『感謝します』という一言を聞いて嬉しくなっただけです。人同士の関係はこのように、誠意のある奉仕によって、受ける側は非常に自然体で感謝の気持ちを持つようになります。それは私たちの奉仕の質を認めてくれた表れです。今のような環境では、活動はとても大変でも、喜びを感じるものです。その喜びは、私たちの人や物事に対する態度に表れ、人々に温かさを与え、苦難に在る衆生に最も必要としている愛の思いやりを与えることができます」。

上人はこう言いました。若者の小さな親身な行動は「敬老」の心を表しており、家で親など年配者に孝行し、外でも同じように年配者に接することが大切です。病院では病に苦しんでいる患者さんや、心配と焦りに心を痛める家族を見かけたならば、肉親に對するようになり心配してあげます。病院職員も自分の兄弟姉妹に對するような気持ちで、優しい思いやりと慰めを掛けるべきで、これが即ち「覺有情」と言われる菩薩の精神です。

誰もが真心で人に奉仕するならば、誠意のある見返りが戻ってききます。病院に感謝の意を表す手紙を出す患者や家族もいれば、ネット上に公開して医療スタッフを褒め称える人もいます。そういう諸々を思い出すと、自分自身も嬉しくなり、警備員たちは慈濟の進む方向を理解すると同時に、自然と言動に慈濟の人文精神が現れるようになったのです。これが慈濟の特色です。正しいと確信すれば、その方向を堅持して歩み続け、より多くの善人が善行するよう導くのです。（慈濟月刊六五三期より）



◎ 訳・慈願  
絵・林淑女

## 無常を思い、一秒一秒を心して過ごす

無常を悟り、仏法の真実と教育を体得し、  
一瞬一瞬、生命の価値を存分に発揮し、  
足を地に付けて、この世に有益な事をするのです。

## 普

段は時間が過ぎ去る早さに感嘆  
しますが、今度ばかりは時の過  
ぎるのが遅く感じられてなりません。

実際、時は同じように過ぎてい  
るのですが、過ぎていかないのは心の問題な  
のです！四月二日に起きた台鉄のタロ  
コ号列車事故は、瞬時にこれほど多く  
の死傷者を出し、悲しみに包まれまし  
た。この世が突然、煉獄と化し、肢体が  
バラバラになり、家族が呼べども戻っ  
て来ないことに対して、どうやって耐  
えたら良いのでしょうか。私は何日も続  
けて、犠牲者を見るのが忍びなく、負  
傷者の気持ちを考えるといたたまれな

くなり、その状態は言葉で言い表すこ  
とができません。

この世は瞬時にして全てが変わって  
しまいました。あまりの悲しみに言葉  
が出ない時、幸いにもこの世に人の温  
情がありました。「人が傷つけば我痛  
み、人が苦しめば我悲しむ」という  
菩薩心と社会各方面からの「同体大悲  
(人々を自分と一体に思う大慈悲)」と  
いう励ましで、私たちは直ちに支援し、  
被災者を慰めることができました。  
真つ暗なトンネルと変形した車両の中  
で救助や傷の手当てをするのはとても  
困難な作業ですが、皆が最大限に努力

と団結で愛の力を結集し、奉仕しました。人間（じんかん）には感慨深い事が多く、感謝の情も言葉では言い尽くせません。

犠牲者の家族に思いを馳せると、そのご両親や親しい人達がどれほど苦しみと痛みに苛まれているか、とても忍びなくなり、頭から離れられません。方法をこうじて彼らを慰めても、自分の心の傷を癒さなければならぬと分かっています。また私たちは周囲の人をもっと大切にしなければなりません。良縁を結ぶだけでなく、悪縁を良縁と化し、時を把握して「今生で済度し、

来世を待っていてはいけない」と思いました。

仏陀は「無常」、「苦」、「空」の四字を用いて人生の道理を言い尽くしました。今回の事故は、瞬時に車体の破損で生命が消失し、言葉で言い表せない苦しみを造り出しました。それは仏陀が言っている、この世の「苦」と万物は「空」に帰すことを証明しています。「苦」と「空」は「無常」に属し、「無常」、「苦」、「空」は人の世の真理なのです。犠牲者は既に此の地を捨てて彼の地へと、それぞれの縁に従って往生しました。私たちは悲しみを祝福に変え、

彼らが良い縁の所へ行って、新たな人生を展開するよう祝福しましょう。とても忍びない時、皆が敬虔に心を尽くし、また仏法の真実を体得しました。

これは「大いなる教育」であり、真の教育でもあるのです。皆さんが無常を忘れず、着実にこの世に有益な事を成すことを願っています。六道万行とは、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧です。布施は最たるもので、智慧で發揮するのです。布施とは、見返りを求めず、なおかつ「財施、法施、無畏施」を平行して行うことですが、智慧を運用しなければなりません。人生におい

ては着実に奉仕し、一瞬一瞬の生命の価値を存分に發揮させることです。これこそが善業を造ることであり、あらゆる行いは自分に戻ってきます。

**常に生命の価値を發揮し、絶えず善行するよう人々に呼びかける**

最近、私が話す言葉の中で、最もよく出てくるのが「驚世災難（世を震撼させる災難）」、「大哉教育（大いなる教育）」だと思えます。コロナ禍が覆う世界で、地・水・火・風の四大不調和によって暴風雨、旱魃、森林火災な



どが頻発し、生態が急を告げています。警戒心を高め、さらに覚悟しなければいけません。

大宇宙という営みの中で、有形のものには全て「成・住・壞・空」、人体という小宇宙には「生・老・病・死」、そして心には「生・住・異・滅」という過程があります。警戒すべきなのは、心に善の一念が起こってもすぐに消えて定まらないということです。心に湧き上がった時にそれを永遠の念にできるでしょうか？もし心が不健康であれば、無明の煩惱は形ある災難を造り出

し、小宇宙が大宇宙に影響して「壞」、そして「空」に向かって歩みを進めてしまいます。

衆生の共業（ぐうごう、多くの生物に共通する果報を引き起こす業）とは、無明の煩惱によって作り出された業ですが、それを解決するのも人間なのです。人は自らを救うだけでなく、悟りを開いた後に他人を悟りに導くのです。自分が覚悟すれば、広い心をもって自分を愛し、家族を愛し、遍く宇宙天地間の萬物衆生までも愛することができます。

こんなに広い範囲を愛するのは可能でしょうか？心が広く純真であるなら、自然に虚空をも包み込むことができます。苦しんでいる人、無明に深く落ち込んでいる人に寄り添って、心の束縛から解き放し、禅定の智慧でもって解き放つのです。このような愛なら広く、永遠のものにすることができます。

より多くの菩薩が集まって、一緒にこの世のために奉仕するのです。人心の浄化と災難の終息に期待し、この世に悲しみの声がなくなり、人々が苦難

から遠ざかることを願っています。

一人の声は微小でも、皆で広く法音を伝え、善道へ向かうよう呼びかけ、共に福縁を結ぶことが必要です。良い言葉が一言でもあれば、多くの人々を発心させ、立願へと導くことができます。身をもって愛を発揮する模範になれば、良い話は尽きないほどあるはずで、多くの衆生を済度できるでしょう。一秒毎に生命の価値を発揮し、声を上げて世の人たちと共に善行をしましょう。皆さんの精進を願っております。

（慈濟月刊六五四期より）



林翠雲

花蓮市  
元クリーニング店経営者  
リサイクル活動歴：28年

【リサイクルボランティアとその歩み】

文・葉子豪 撮影・顏霖沼 訳・慈願

## 快適な生活環境から踏み出した地域の婦人

花蓮市美崙地区に住む林翠雲（リン・ツイユン）さんは、仕事ができるだけでなく、話し上手なリサイクルの達人ですが、三十年前、證嚴法師が環境保全を呼びかけた時、彼女は全くの門外漢でした。

「慈済が花崗山で『人間浄土を目指して』というイベントを催した年、私は初めて慈済と出会いました」。林さんは、一九九二年の「廃紙を回収して台湾の森林を助けよう」という活動で使い古した紙箱を持って行けば、テッシュと交換が

できたことを覚えています。「私はテッシュが欲しかったのではなく、姉姐（スージエ）たちがきれいに並んでいるのを見て、とても良い感じがしたのです」。

彼女は慈済に参加した後、娘の高校の教師だった張淑貞（チャン・スージエン）先生と知り合い、先生が指導している「花蓮環境保全行動チーム」に参加してから、ゴミの減量と資源回収に励みました。経営していたクリーニング店でも大量のビニール袋を使用していたため、夫と相談

してコストに関係なく、クリーニングした服に紙袋を使い、お客さんには繰り返し使ってもらおうようお願いしました。野菜を買いに行く時も入れ物を持って行き、自分でビニール袋を使わないだけでなく、お店や大衆、自治体にも呼びかけました。呼びかけが影響して最も大きな成果を挙げたのが、「ゴミを地面に置かない」政策が花蓮で実現されたことです。

一九九六年のある晩のことを林さんは今でも覚えていて、「私たちがある台北の師兄の家で夕食をご馳走になっていた時、師兄はゴミ収集車が来たと言って、ゴミを捨てに行きました」。

当時、花蓮では「親子車」と呼ばれる、市長や各里長を説得することができ、「ゴミを地面に置かない」政策が回復し、花蓮県全域に広めました。一九九七年、林さんは環境保全の功労者として「全国環境保全推進功労ボランティア賞」を受賞しました。

「アメリカにいる親戚に呼ばれた時、法師は私に、向こうで経験談を大いに話してくてください、と言いました」。彼女は西部の大学や専門学校、花蓮の慈青研修会に始まって、太平洋の向こう側でも話をしました。しかし、その講演の内容は、道理を話すのではなく、自分のやってきたことや外出には携帯食器やハンカチを持参したり、市場に行く時は買い物

ゴミ収集車があつて、作業員が先ず「子車」を決まった場所に持って行き、定期的な「親子車」がゴミを運び出していました。子車のゴミはいつもいっぱい地上に散乱し、衛生上問題が多かったのです。そこで林さんはチームメンバーと一緒に花蓮市長に提案しました。市役所は先ず美崙地区で試験的に「ゴミを地面に置かない」方法を二カ月間行うことにしました。

それは容易なことではありませんでした。或る人はごみ収集の時間に遅れ、怒りのあまり、ゴミを林さんの店の前に置いたこともあり、区役所も抗議が殺到して、一度は止めようかと思いましたが、しかし、彼女と環境保全行動チームは諦め

籠や容器、袋を持つていくこと等でした。

当時、大声を上げて呼びかけた環境保全の観念は、今では常識になっています。高齢になってきた彼女は、以前のように「お節介」になる必要はなくても、相変わらず勇猛に精進し、小型トラックを運転して地域の拠点から回収物を集めていきます。また、宣伝用の旗も回収して特大のエコバッグを作ったりして、時間を無駄に過ごしません。

「その実、真の環境保全とはゴミの減量であつて、元々、環境保全は簡単なことです。ただやるか、やらないかだけです」と林さんは悠然と語りました。

(慈濟月刊六四五期より)

# 日常的なりサイクル ファミリーアルバム

彼らは本当の家族ではないが、家族以上である。  
無数の小家族が慈済リサイクルステーションという大家庭に集まり、  
朝から晩まで共に過ごし、先頭に立って善行することで、  
縁と福を大切にし、互いにケアし合う。  
月刊誌『慈済』「日常的なりサイクル・ファミリーアルバム」は、カメラ  
マンの黄筱哲さんが記録したリサイクルステーションの日常である。  
あなたが家族と一緒にここを訪れる日を待っている。



台南の女南環境ボランティアの集合写真



## 故郷で出発した 【安南リサイクルステーション】

昨年、幸運にも「大地の守護者」というコラムのドキュメンタリー記事をまとめて、『疼惜（大切にすること）』という一冊の本を出版することができた。リサイクルステーションには、心を動かすリサイクルボランティアの人生があるだけではない。それぞれが一つの大家族のような場所なのだから、その日の出来事を記録に残しておけば、いつか皆で振り返って見ることのできる「ファミリーアルバム」になると信じ、コラムにするというアイデアが浮かび上がった。

日常的な  
リサイクル  
ファミリー  
アルバム

台湾全土に8千8百カ所余りの慈濟リサイクル拠点があり、それぞれが大家族のようである。ボランティアたちは心して資源回収を行い、互いに関心を寄せ合い、協力していた。さらに、リサイクルステーションを自分の家だと思って、日々の出来事を記録に残している。実際に訪れて写真を撮り、リサイクルステーションの皆の思い出を残すために「ファミリーアルバム」を制作した。

春節の二日前の夜、懐かしい台南の安南リサイクルステーションを訪ねた時、遊んでいた二人の子どもの姿が私の目を引いた。後で知ったが、子どもはボランティアの陳佩瑩（チェン・ペイイン）さんのお孫さんで、兄妹だそうだ。兄は幼稚園の年長組で妹は年中組、冬休みなので祖母についてステーションへやって来て、手伝ったり遊んだりしていた。楽しそうな二人を見ると瞬時にして、二十数年前に弟と一緒に母についてリサイクルステーションへ来ていた時の自分のことを思い出した。当時、私たちはこの兄妹と同じようにリサイクルの意味がよく分からず、回収解体エリアだけでも本当に楽しい時間を過ごした。すでに中年になった私が、今この兄妹と知り合いになることはないが、「安南リサイクルステーション」は共通の記憶に残る場所となった。



リサイクルステーションに入ると、「仏」という字をかたどったコバノサンダンカが植えてあった。

### 身を以て園芸を愛する

安南リサイクルステーションの門をくぐると、すぐ両側にある園芸の造形美に惹き付けられ足を止めた。右手に小さな蓮の池があり、小魚が泳いでいるのが見え、左手には「仏」という字をかたどったコバノサンダンカが植えられていた。

母によると、これらの植物は黄（ホワン）師兄（スーシオン）という人が世話しているそうだ。その日の正午、ボランティアは次々に休息のために家へ帰って行ったが、ほど遠い所で地面に跪いて両手で落ち葉を袋に入れてる人の姿が見えた。その人が黄師兄に違いないと思い、近づいて声をかけた。話を聞くと、彼が七十一歳の黄師兄で、持病のため複数の痛み止めを服用しないと生活できないが、体調がよい時にリサイクルステーションに来ており、痛み出したら耐えられなく



リサイクルステーションに小さな蓮の池があり、小魚が悠々と泳いでいた。



なるとのことだった。その後、幾度かリサイクルステーションに立ち寄ったが、彼の姿は見えなかった。残念だったが、あの日に一枚だけ撮った写真に黄師兄の地道さがにじみ出ていた。彼が両手を箒代わりに植木の下に落ち葉を掻き出していたのは、植物を護るためだけでなく、余分な土を掃いてしまわないように気を配っていたのだ。目の前の植木は青々と茂っていた。黄師兄の苦痛が和らぎ、一日も早く快復することを祈った。



## 精神の伝承

数年見ないうちに、ビニール袋の分別エリアの周りに植えてあった何本かのマタガスカルアーモンドが大樹に成長し、汗を流しているボランティアに日陰を提供していた。このリサイクルステーションは、回収されたビニール袋の数がいつも一番か二番目だといわれるほど多いのだが、熟練したボランティアは、軽く触るだけで素材と種類が分かる。彼らの指先の繊細さとそのスピードには、感服しな





↑2013年陳蕭繡蕉さんがビニール袋を仕分けていた。  
 いわけにはいかないほどだ。山のように積まれた  
 ビニール袋を午前中には分別し終えてしまう。

皆の真剣且つ活気に満ちた様子を見てみると、亡  
 くなったボランティアの陳蕭繡蕉（チェン・シャオ  
 シウジアオ）お婆さんを思い出した。二〇一三年九  
 月三十日、私はビニール袋の分別エリアで彼女の写  
 真を撮った。当時、ビニール袋を仕分けする人は少  
 なく、八十歳を超えていた繡蕉お婆さんは、毎日弁  
 当を持って三輪車でリサイクルステーションに通っ  
 ていた。ビニール袋の分別場所は今も同じだが、違  
 うのはボランティアが以前より大幅に増えたことだ。  
 あたかも繡蕉お婆さんの精神を受け継いでいるかの  
 ように、誰もが労力を惜しまず取り組んでいた。

### ベテランボランティアと出会う

ペットボトルエリアに来ると、か  
 なり静かだった。そのボランティア  
 アは皆、学生のように自分の持ち場  
 で真面目にペットボトルのキャップ  
 と輪を分解していた。突然、「筱哲  
 （シャオジョー）さんお久しぶりで  
 す。私たちの写真を撮るために戻っ  
 てきたのですか？」と声をかけられ  
 た。声の方に目をやると、一番端の  
 方に座っていたのは、髪の毛が一番  
 白い黄惠雀（ホワン・フィジュエ）



日常的な

リサイクル  
ファミリー  
アルバム

さんだった。彼女は高齢でも視力はよい方なので、何年も会っていないのに、直ぐ私のことに気がついてくれたのだ。暫くすると皆、仕事を片付け、帰る準備を始めたが、黄さんは熱心に話を続けた。「私のバイクに載せてある大型のポトルは、水遣りに使うのですよ。今年はクズイモをたくさん植えたの。実が大きくて出来がいいので、収穫後は精舎に送って皆に食べてもらいますね」と言った。聞いていると温かい気持ちになった。日ごろは環境保全のために時間を費やしながら、高齢にもかかわらず自力で野菜作りをしている。それも自分のためではなく、皆に喜んで食べてもらうためなのだ。だからこそ、證嚴法師はベテランボランティアたちをとっても大事に思っというらしい。



## 息の合ったチーム

まだ分別されていない回収物は全部、奥の「回収分別エリア」に置いてある。特に旧正月が近づく時期とあって、回収物は山のように積まれている。分別作業を一日でも休めば、山は大きくなってスペースを使う。ここは作業全体の重要な準備工程なので、午前中だけ



で二交代制になっており、早朝の五時過ぎに来ているボランティアが、八時頃に来る人に仕事を受け継ぐ。ボランティアの数も、仕事や子守、農作業、他の活動の予定などによって多くなったり少なくなったりする。

一階分ほどの高さに積まれた回収物を分別し終わらないうちに、回収トラックがまた回収物を積んで戻ってきたのを見て、ボランティアは対応できるのだろうかとか心配になった。だが、意外なことに、師姐（スージエ）たちは自信満々に答えた。「私たちが過小評価しないでくださいね。私たちの分別速度はとても速いので、午前中だけで三分の一の量を分別できますよ!」。続いて、一人のボランティアが作業台に回収物をざっと広げると、周りを取り囲んでいた人たちは、獲物を見つけたかのように、直ぐに両手を伸ばして各種回収物を足元に置いてあった黒い籠に放り込んだ。これら常連ボランティアは皆、健康な手で機敏に反応し、長期にわたって絶妙な暗黙の了解ができています。他の人ではあれほど効率のよい作業はできないだろう。



ペットボトル分別エリアの環境ボランティア。後列左から卓美珠、欧芳枝、蔡明達、顔秀玉、王恵美。前列左から史陳麗珍、呉錦綢、郭碧蓮。



ビニール袋分別エリアの環境ボランティア。後列左から劉美珍、鍾金枝、史月卿、陳秀卿、施玉趁、陳英紫、謝美雲、陳岡市。前列左から林阿筆、謝妙榮、吳秀麗。



回収分別エリアの環境ボランティア。左から翁金鑾、周淑茹、馬秋葉、黄秀兼、謝麗秀、周邱雪。

## 廬山の真面目（しんめんぼく）

連日安南リサイクルステーションで取材を続けた。どのエリアも回収物の量が、減ったり増えたり繰り返して、やっと仕分けを終えたと思ったら、翌日にはまた袋がうず高く積み上げられていて、早朝から夕方まで毎日のように分別と整理をするボランティアの姿があった。皆、心を一つに、各自の持ち場で懸命に作業する。仕事が終わりに、腰を上げてマスクを外すと、ようやくその人の素顔を見ることができた。二〇二一年二月二十二日、各エリアのリサイクルボランティアの集合写真を撮った。その時の写真を整理していると、一人ひとりの自信に満ちた表情に、思わず賞賛の声をあげたくなってしまった。皆、素晴らしくて美しいのである。残念ながら、時間の関係で欠席だったり、ページ数の関係で載せられなかったりしたボランティアが、まだ大勢いたのが心残りだったが、それでも皆のために多くの写真を撮ったことを誇りに思っている。何より、ベテランボランティアたちの素顔を残すことができた。今日を皮切りに、リサイクル家族のアルバムに、最初のファミリーメンバーが登場したと言ってもいいだろう。（慈済月刊六五三期より）

# 教育の方針が見つかつた

二十年余り前、子どもたちの教育のためにカナダに移住した。

初めはプレッシャーのない学習環境を与えたいという考えからだつたが、思いも寄らず、現実には東洋と西洋の文化のギャップの中で、

私は「教育ママ」になり、かえつて子離れできなくなつてしまつたのだ。

## 数

カ月前、大愛テレビで放映された「楽しかつた我が家」という連続

ドラマを思い出していた。それは私の中学時代のクラスメートである冷莉萍（ロン・リーピン）さん一家の物語だつた。

ドラマの時代背景は、正に私の子どもの頃を再現していた。冷さんの家で豆乳を飲んだかどうかは覚えていないが、通

りの曲がり角にあつた豆乳屋のことは覚えていいる。夏の朝、母と一緒に植物園で

運動した後には必ず立ち寄つて、そこで朝食をとつた。店内に満ちた濃厚な豆乳の匂い、それは記憶の中の母の匂いでもある。また、南昌街のそば屋も覚えていいる。牯嶺街の古本屋にこもつて「三国志」を読みふけり、行天宮で線香を手、「収驚」

（注1）を待つていたことをぼんやりと覚えていいる。

子供の頃、私は実に自由な日々を過ごしていた。母は日々大家族の家事に忙しかつた。学校へ上がる前は、母が外出すると私たちも遊びに出かけていた。食事の時間に忘れずに帰えればよかつたのだ。その時代の母親たちは皆同じで、家族のために励み、儉約家だつた。字は読めなかつたが、自分なりの方法で私たちを教育した。観て来た台湾オペラのストーリーから忠孝と節義などを子どもに教えた。私の算数は母に見習つて「標会」（注2）の利息を計算して学び始めた。両親は私たちの勉強を見ることはできなかったが、私はまったく気にしなかつた。なぜなら、

両親はすでに模範を示してくれたからだ。昔、台湾の生活環境は単純で、子供たちは親の苦勞を理解していた。そうした時代の背景が私たちの世代を憂いの多い環境の中でも強く生かし、親は模範を示して、私たちを苦勞に耐え、頑張ることができる人間に育てくれた。「足るを知つて楽しい人生を送り、忍び難きを耐えれば、心安らぐ」という家訓は、子どもの頃から居間の壁に掛けられていたが、私にとって生涯にわたつて努力し続ける座右の銘でもある。

（注1）収驚：神仏に祈る、厄払いの一つ。  
（注2）標会：金銭の融資を目的とする相互扶助の会。「無尽講」または「頼母子講」ともいいう。



## 英語と中国語のどちらを先に学ぶべきか

時が経ち、経済の高度成長を経験し、時代は次の世代に移ったが、少子化で、子どもは親の細心の保護の下で成長している。初めカナダに移住したのも、子供が比較的プレッシャーの少ない環境で成長することを望んだからだ。しかし、移住してから、子供の教育で教養に関する本ばかりを読んでいたことに気づいた。

「子どもをスタートラインから負けさせてはならない」という言葉には同感である。私が子どもの頃に育成した忍耐力を次世代の教育に使う時、いわゆる教育

ママとなり、子どもの教育に固執してしまっただろう。E世代の子どもたちは、英語や西洋の自主学習の環境で成長しながら、一方で素晴らしい伝統的な中国文化も認めてくれるのか、私にとって大きな挑戦だった。海外に移住した全ての親は子どもに対して同じような期待を持っていると思う。

中国語が全くできず、中国の歴史についても理解していない移民二世をたくさん見てきた。それは最初、子どもたちをトロントに連れてきた私の目的とはかけ離れたものである。子どもを尊重し、独自の考えを重んじる西洋の教育方針は確かに好きだが、彼らが成長するにつれ、



親との間に文化的なギャップが生じることも知っている。子供たちがそれらを忘れないように、台湾から小学校の教科書一式を持参した。ところが、子どもが小学校に入学すると、今度は英語が第二言語のままであることを心配し、慌てて英語の家庭教師をつけた。一体、中国語を先に覚えるのが大事なのか、英語が先なのか。

中国と西洋は文化が違うため、私は子どもの学習について、あれこれ考え、方向が定まらなかった。子どもがトロント慈済人文学校に入って初めて静思語に出会った時、やっと大海原で流木を見つけ

●2004年、張素雯さんと子どもたちがカナダ東部を旅行した時の写真。





たように、子どもの教育に希望の光が見えた。本当は、中国語と英語のどっちを教えるにしても、一番大事なのは人格教育であると、昔、親が教えてくれたことを思い出した。

### 親も学ぶ

「良い言葉を口にし、善良な心で、善行しよう」という短い静思語。慈済人文学校の先生の解説によれば、難しいこと

●2008年、トロント慈済人文学校で静思語作文コンテストが行われた。当時教頭だった張素雯さん(右1人目)が賞状を授与した。息子の丘自豪さん(右4人目)がクラスメートと共に賞状を受け取った。

ではない。私は子どもの連絡帳にサインする際、自分の行動が完全でなく、日常生活で実践することが静思語を学ぶ究極の目的であることに気づいた。

慈済人文学校の先生の熱心な誘いで、私は学校で生徒の世話をする「愛心ママ」ボランティアになり、先生がどうやって静思語を教えているのかを目で見る事ができたことに感謝している。私は静思語を一字一句理解して感化され、静思語教育に投入することになった。

ストーリーを話す時、私は自分の体験を例にするのが好きだ。物資が欠乏していた時代で、六人兄弟が家に一台しかない自転車に交代で乗っていた話をした

時、子どもたちに「共有」とは何か、を教えた。「楽しいと感じるのは、何かをたくさん持っているからではなく、争うことが少ないからです」。

静思語は、私と保護者たちの架け橋にもなった。ある日、女子生徒の瑩(イン)ちゃんのお父さんが助けを求めてきた。瑩ちゃんは教会から帰ってくると、父親に、「天の父こそが父親であり、お父さんは父親ではない」と言った。ちょうど学校で「太陽の光の如く、親の恩は大きい」という静思語を教えていたので、私は瑩ちゃんに、「天の父は、子どもが多すぎて、面倒を見ることができないから、地球の子どもに一人ずつ父親を与えて子ど

もの世話をするのよ。だから目の前のお父さんは空の太陽と同じように偉いのですよ！」と説明した。瑩ちゃんは納得したようで、笑顔で「パパ」と呼んだ。

## 子どものQ&A

證嚴法師の智慧のたまものである静思語と慈濟人文は、教える時のインスピレーションを与え続けてくれる。それをわが家の子どもに引用すれば、もっと役に立つ。以前、家訓を胸にカナダに移住した後も、私は勤勉で儉約な生活をしてきた。こどもは成長が早いので、なるべく隣近所からのお下がりをもらったりして節約し

た。娘が思春期に入って、外見を気にするようになる。あまり古着を着たがらなくなった。ある日、娘が、「ママ、うちは貧乏なの？どうして私たちはいつも人のお下がりを着ているの？」と尋ねてきた。その時、子どもたちは慈濟人文学校に通って既に五年が経ち、多くの静思語を勉強した。「あなたはどう思う？」と私が娘に聞き返すと、彼女は、暫く考えてから、「日常生活で足りないものもないし、定期的に寄付もできるのだから、貧乏ではないわよね！」と答えた。丁度その頃、人文学校ではこういう静思語を学んでいた。「ゴミが黄金になり、黄金が愛に変わり、愛が清流となって世界を

巡る」。「それじゃ、大きくなって着られなくなった服はどうするの？ゴミとして捨てるの？」と娘に聞いた。娘は、頭を傾けて考えてから、にっこりと笑った。自分で答えを見つけたようだ。

## わが家にもある楽しい時間

昔、物資が欠乏していた時代は自分の努力次第だった。教育は将来の人生を変えられることができる力を持っていた。

時代は古い世代からE世代に進化した。が、しかし、西洋教育から得た成果は、すでに私が描いた風景とは別のものになっていった。情報過多で、3C製品が溢

れたこの時代には、子どもを教育する親の役割が衰退しているように見える。しかし、教育には依然としてその力があり、静思語が正にその力の源として、少しずつ日常生活の中で知らず知らずのうちに累積しているのである。私は慈濟の志業に投入して身を以て善行を行い、子どもの手本になることを期待している。また、家では静思語を使って、子どもたちとコミュニケーションを取り、成長を見守っている。このように静思語をわが家の家風に行っていることを、何年か経って回顧した時に、「わが家にも楽しい時間があった」と思い出すものと信じている。

(慈濟月刊六四七期より)

## 愛で心を充実させる

文・劉媛蓮、顔玉珠（慈済マラッカ支部文化・歴史チーム編集）  
撮影・顔玉珠 訳・善耕

子供はまだ幼く、母親もまだ若い。慈済ボランティアは、この家族が必要としているのは単なる経済的な支援だけではないと考えた。そこで医師と理学療法士にも訪問ケアチームに参加してもらい、子供にケアのスキルを教え、母親のリハビリを支援しながら、立ち直ることを期待している。



セ ルヴィは二回の結婚に失敗した後、生活の重荷を背負っている。

四人の幼い子供と七十九歳の母親、日雇い労働者である五十九歳の父親、障害を持つ姉という一家の中心になって借家に住んでいる。

彼女は病院で夜間の清掃婦として働き、明け方に退勤すると急いでゴム園で木の樹液採取に行く。そして、数日おきにゴムの木から集めたラテックスを集積所に持っていく。彼女は両手に約四キロのラテックスが入ったバケツを持ち、休み休みに二十分間歩いて、やっと目的地に到着する。長年、重いものを担いできたために背中が痛み、何年も耐えてきた

●理学療法士の指導のもと、セルヴィは9カ月ぶりに立ち上がった。辛い表情を見せたが、人生の希望の光りを見て、心の中ではとても喜んでいた。

が、ある日、両脚が言うことをきかなくなり、力が入らなくなってしまった！昨年九月、彼女は働けなくなってしまったが、夫は巻き添えになることを心配して家を出たきり、今日まで音沙汰がない。

医師の診断によると、彼女の背中に出た脂肪腫が神経を圧迫しているために両脚に力が入らない、とのこと。昨年十月に手術を受け、二カ月余り入院と治療をしたが何の進展もなく、家に帰って横になって休養するしかなかった。家族は彼女の歩行障害を考慮して、今年三月に

平屋に引越した。

新しい環境に移った後、知らない土地で、普段は臨時雇いで生計を立てていた彼女の父親は一時、仕事が見つからなかった。その上、コロナ禍で外出制限令が出たため、生活はさらに苦しくなった。遂に、家族全員の生活費は、姉の月額二百五十マレーシアリングギット（約六千二百円）の障害者手当に依存するしかなかった。

家計の大黒柱が一瞬にして倒れ、年若い両親と学校に通っている子供たちを抱えて、正に泣きつ面に蜂である。どうしたらいいのか？ 彼女は自分の人生を断つべきだろうかと考えたこともある。

## 絆の強い一家

幸いにも天は人を死に追いやることはない。彼女は親族や友人に困難を打ち明け、同じインド系の慈済ボランティアであるナダラジャンさんは直ぐに慈済に報告した。

ボランティアは三月二十九日の一回目の訪問調査で、先ず緊急支援物資を届けため、一家は当座を凌ぐことができた。四月から正式に定期ケアが始まり、毎月の生活費や物資の援助に加えて、訪問ケアチームはいかにして家族を再び自立させることができるかを考えた。彼女はただ若く、四人の子供はまだ幼いからだ。

ボランティアの王鈺清（ワン・ユーチン）さんは、「子供たちが彼女を移動させる時に浮かべる苦痛の表情を見る度に心が痛みます」と語った。また彼女の年若い両親が自分たちの病気について話した時、王さんは、多くの痛みがストレスから来っており、家族の心と体を落ち着かせるには専門の医師が必要であることに気付いた。

六月末、二人の慈済人医會の医師がボランティアと一緒にセルヴィイの家を訪れた。中に入ると、家の中がきれいに片付けられていて、十歳のキシヨールさんと十一歳のスメンさんが台所で料理を作っていた。かまどに鍋を載せた高さが兄弟たちの胸の高さを超えているのを見て、

黄月吉（ホワン・ユエジー）医師はびっくりしたが、自分の子供の頃を思い出した。早くに母親を亡くし、父親が一人です十人の子供を育てた。黄医師は幼い頃から家事や料理の手伝いをし、毎日家族全員に朝食を用意してから急いで学校に行っていた。彼女は感慨を込めて、「環境は子供達に自ら学ばせ成長させます。私は子供たちが環境の試練に負けないように、努力して向上していくことに期待しています」と語った。

兄弟二人が協力して大盛りのチャーハンを作っていたが、それはボランティアや医者が来てくれたことに感謝しようとして、その腕前を見せていたのだった。



黄医師はいじらしく思っただけを手伝い、彼らの物分かりの良さを褒めた。さらに、子供たちが幼くして家庭の責任を担っていることと、セルヴィの楽観的な笑顔を見て、黄医師は率直に、もしも母親が日頃から悲しい顔をして、情緒不安定だったら、子供たちと年老いた両親は間違いなく影響を受け、その家族の状況は異なっていただろう、と言った。

直ちにリハビリすれば、  
回復が期待できる

蘇美娟（スー・メイジュエン）医師はセルヴィを診察し、反応を試してみたところ、

足にはまだ知覚があることが分かり、「希望が見えました！」と嬉しそうに言った。彼女が手術を受けて病床に臥してから九カ月近くが経った。蘇医師は、専門の理学療法士に診断してもらい、リハビリの最適時期を逃さないようにすることをボランテアに提案した。同時に蘇医師もセルヴィの子供達に母親の足をマッサージするよう指導し、血行を促進して筋肉細胞を活性化させることで、長期間の寝たきり状態が身体に与える影響を減らすのだと教えた。

ボランテアの黄循糧（ホワン・シュンリヤン）さんは蘇医師に教えを請うた。セルヴィは体を移動する時に力の入れ方

を間違えたために、この四カ月間に二台も車椅子を壊してしまったのだ。蘇医師はセルヴィがどうやってベッドから車椅子に移るのか、やってみせてもらった。三人の子供と彼女の姉、そして彼女自身がそれぞれ力まかせにベッドから降りて、床を這って車椅子に移動していた。その過程で、彼女の顔は苦痛に歪んでいた。傍で見ていた医師とボランテアたちは手に汗を握り、彼らが引つ張り合つて、手術後の傷口と脊椎を傷つけるので

●ボランテアたちの世話に感謝するため、二人の兄弟は台所で食事の準備をしていた。自分たちの胸を超える高さの調理台にあった鍋でチャールンを作ったので、ボランテアのナダラジャンは心が痛むと同時に、ハラハラした。

はないかと心配した。

ボランティアの王鈺清（ワン・ユーチン）さんは、体を移動させる時の痛みのためにセルヴィは起き上がることを嫌うようになり、間接的に動く意欲をなくしたのではないかと言った。蘇医師は、理学療法士から正しい移動方法を教わって、お互いの安全を守りながら、介護の負担を軽減するようボランティアに依頼した。蘇医師は、彼女の家族も診察した。お姉さんは、介護中に長期間の不適切な力の使い方が原因で肩が凝り、父親は恐らく過労による足の痛みを抱えていた。そして、母親は慢性疾患を患っていた。

六月末、ボランティアと理学療法士の

学ぶように、と念を押した。理学療法士とボランティアが帰る前、子供たちはお茶を出した。彼女はそれを見て心から嬉しく思った。

理学療法士は、セルヴィのマットレスが柔らか過ぎるため、長期に亘って横臥すると背中の不快感の主な原因になるので、もう少し硬いマットレスに変更することを勧めた。黄循糧さんはそれを聞いていた。その翌日、ボランティア仲間から、思いがけず前日に細切りココナッツで作ったマットレスのリサイクルについて問い合わせがあったことを聞いた。「願があれば力が出ると言うように、セルヴィ一家をこれまで多くの人が助けてき

黄昱庸（ホワン・ユーヨン）さんが再びセルヴィの家を訪ねた。彼女の痛みや触覚などに対する反応を見て、理学療法士は彼女の体調はリハビリを始めても良く、回復できる可能性が高いと判断した。理学療法士の指導と助けで、彼女は九月ぶりに立ち上がった。彼女は体の痛みに耐えながらも、嬉しかった。

彼女の質問に答えるだけでなく、理学療法士は彼女を車椅子に移動させる方法を子供たちに教えた。シンプルでできばきした動作は、いつもの力任せの移動とは雲泥の差だった。黄循糧さんは子供たちに、注意深く観察して、母親のリハビリを支援するための正しい看護スキルを

ました。一歩ずつ成就することで円満に現在に至りました」と彼は喜んだ。

### 朝な夕な思い焦がれていた贈り物

五月の母の日に、ボランティアは子供たちに歌を教え、花を準備した。長女のランジャニが代表で母親に花を捧げ、ボランティアの手引きで子供たちは目上の人に果物を食べさせることで愛を表したので、セルヴィはとても感動した。そして、セルヴィは自分の母親にその花を差し上げ、抱擁してキスした。王さんは、次のように述べた。「家族全員をケアし、思いやってこそ、家庭が円満になるのです」。



ボランティアと医師に感謝の気持ちを表すため、セルヴィと子供たちは絵を描いてカードを作り、六月下旬に発送した。彼女は力が入らない手で、次のように一字、一筆ずつ描いた。「證嚴法師と全てのボランティアへ、支援と励ましに感謝しています。本当にありがとうございます」。

ボランティアも心を込めたプレゼントを家族全員に用意した。今年中学一年生の痩せて背の高い長女のランジャニは、時折人差し指を噛みながら、恥ずかしそうに「初めてプレゼントをもらってびっくりしました。でも嬉しかったです！」

●過去数カ月間のボランティアの世話に感謝するため、セルヴィと子供たちは絵を描いてカードを作った。

と言った。彼女にとってママの不幸は本当に悲しかったそうだ。彼女と兄弟は母方の祖母の負担が軽くなるように、それぞれ床掃除と炊事、母親の日常生活の世話など、手伝いの役割分担を決めた。

皆がプレゼントを貰ったが、ボランティアはセルヴィに家の外で受け取るように言った。一台のトラックが彼女の前でゆっくりと止まった。荷台には彼女が朝な夕なに思い焦がれていた冷蔵庫が載っていた。自宅の冷蔵庫が壊れていたので、一家の買い物と暮らしはとも不便なものだった。ボランティアたちは彼女の声に耳を傾け、適切な中古冷蔵庫を探すのにしばらく時間を費やしていた。

彼女は嬉しそうに笑って、「これはまさに私が欲しかったものです！」と言った。

ボランティアは週に二回、彼女のリハビリ費用を補助し、彼女に努力するよう励まし続けた。学校が始まった後、子供たちを学校へ送り迎える人がいないことを考慮して、ボランティアは、教育に影響が出ないように、転校させ、手続きとスクールバスの登録を手伝った。セルヴィは自分よりも不幸な人を助けるために力を尽くすことを望み、慈済の会員になった。「慈済の助けのおかげで、私は安心していられます。みんなの真心と思いやりは私に希望の光を見せて下さいました」。(慈済月刊六四六期より)

# 五月の出来事

訳・済運

05・03	<p>インドは第2波のコロナ禍で、4月下旬から連日30万人を超す新規感染者が出ており、それに伴って死者も増え続けている。證嚴法師は3日のボランティア朝会で、全世界の人が愛を結集させ、必要且つ十分な量の防疫設備をインドに届けるよう呼びかけた。慈濟基金会は6日の昼に「共に大愛を携え、福を造って善行しよう」と題した、ネットで祈る活動を催し、25の国と地域の約4千の端末が連結して、インドのために祈ると共に愛を募る。</p>
05・04	<p>慈濟アメリカ総支部はシンプリーヘルプ基金会と協力して、4月にセントヴィンセント及びグレナデン諸島で起きた火山爆発の被災者のためにマスクとフェースシールド、ジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）などの災害支援と防疫物資を用意し、本日、駐ロサン</p>

05・10	<p>台湾のカミロ修道会（CADIS）執行長の黄浩然神父と募金センターの李麗秋主任は、花蓮靜思精舎に證嚴法師を訪ね、インドでのコロナ禍支援における協力に關した意見交換を行った。慈濟慈善事業基金会の顏博文執行長と熊士民副執行長が宗教処チームと共に参加した。</p>
05・12	<p>慈濟教育志業の各学校は、台湾におけるコロナウイルスの感染拡大で、12日から学校での規制を始めた。大規模な活動を停止することで、人の流動と接触を抑えることが目的である。全ての学校は19日から一斉に休校し、オンライン授業に切り替わった。</p>
05・13	<p>台湾のコロナ禍は地域社会で感染拡大する段階に入り、慈濟基金会防</p>



05・22	<p>慈濟基金会は新北市の要請に応じて、3千箱の「安心生活箱」を提供し、低所得者や自立生活ができない人、一人暮らしなど社会的弱者の家庭を支援する。本日、静思精舎で梱包作業が行われ、22日と23日に配送し、各自治体の社会福祉部門が配付する。</p>
05・24	<p>中国青海省で22日の早朝、マグニチュード7・4の強震が発生し、多くの建物が損壊して、民衆が避難を余儀なくされた。四川の慈濟ボランティアは災害支援調整本部を立ち上げ、用意した厚手の毛布、オーバー、綿の肌着、マフラーなど防寒物資及びジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）などが本日、青海省瑪多県に到着した。</p>

05・15	<p>疫調整総指揮本部は緊急通達を行なった。即日より防疫措置のレベルを引き上げ、個別訪問ケアを電話訪問に切り替えた。その他、施設へのケアやプロジェクト関連の活動、コミュニティーケア拠点の活動は暫時、全て中止した。緊急に特殊状況が発生した時は個別対応する。</p>
05・16	<p>台湾の新型コロナウイルスの地域社会での感染拡大を受けて、台北市と新北市は防疫警戒レベルを第3段階に引き上げ、17の県と市がそれに準じるレベルに引き上げた。慈濟基金会防疫調整総指揮本部は即日より、以前のように毎日午前と午後に会議を開き、随時、防疫措置の調整をすることになった。また、その日から台湾全土の静思堂及びリサイクル拠点は対外的に開放を中止し、リサイクル福祉用具プラットフォームの運営も停止した。</p> <p>台湾の新型コロナウイルス感染拡大に伴い、慈濟基金会は警察や消</p>

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## 花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825  
玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718  
関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880  
大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000  
台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779  
台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666  
大林慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号  
TEL: 886-5-5372000

## 慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

## 台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770  
慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 2 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989999  
静思人文  
TEL: 886-2-28989888

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## カナダ

TEL: 1-604-2667699

## メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

## ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

## ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

## イギリス London

TEL: 44-20-88699864

## フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

## ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

## オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

## スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

## オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

## 南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

## 中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

## 香港

TEL: 852-28937166

## フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

## タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

## ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

## ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

## マレーシア

Penang  
TEL: 604-2281013

Malaka  
TEL: 606-2810818

## シンガポール

TEL: 65-65829958

## インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局  
TEL: 62-21-50558889

## スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

## ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

## トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

## オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

## ニュージーランド

Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2021年6月18日発行・294号  
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄  
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



## 医療チームが連携して苦痛を和らげた

「0402台鉄タロコ408号事故」の負傷者は2百人余りに上り、そのうち58人が花蓮慈濟病院で治療とケアを受けた。何宗融副院長（左）が入院していた負傷者に灸治療を施した。医療チームは、患者が一日も早く回復できるように、東洋医学と西洋医学の併用治療を行なった。

（文、撮影・蕭耀華 花蓮 2021.4.9）



慈濟日本サイト 慈濟ものがたり